

国際耕種と私・長谷川繁弥<その1>

農村に生まれ工業に進んだが今日に至った背景

私は(財)日本国際協力センター (JICE) の指導員として 2000 年度の「タジキスタン共和国国別特設野菜栽培研修」に携わり、2001 年に国際耕種株式会社 (AAI) に入社後、2018 年末まで JICA 筑波で 21 の野菜栽培および畑作物栽培の研修運営と技術指導を連続して担当した。

AAI は乾燥地農業に関する技術を得意分野として起業したが、今、野菜・畑作物栽培技術、採種技術、稲作栽培採種技術、灌漑技術、市場志向の営農等に係る技術習得や普及のための研修は一つの柱になっている。この発端は JICA 筑波が実施していた野菜栽培技術習得の研修を民間として初めて受託したことにある。AAI にとって経験の無い、そして私自身が予想だにできなかった野菜栽培を直接指導する研修業務に最初から携わり一昨年退職したので、これまでのことを整理してみようと思う。

故郷の新発田市、加治川が流れる飯豊連峰二王子山の裾野一帯は米作りを中心とした典型的な農村である。真冬には凍った田圃を学校まで真っ直ぐ歩いてきたことや、春には地力増進のためのレンゲが美しかったことを思い出す。雪が消えると、あちこちから燻炭作りの煙が上がり、田圃では折衷苗代作りが始まり、種籾は数日風呂に浸けられ芽出しをして播かれていた。その子供達は、田植機、稲刈り機の未だ無い時代は春と秋の農繁期に家の手伝いをするのが当たり前だった。田植えの時には親戚と共に、離れた地域からの臨時雇いの母ちゃん達の力も借りて一気に作業を進めていたので、学校が休みの時は畦を走りながら 20cm 丈の束ねた苗を田圃の中にいる大人達に投げ渡し、大きくなると人手としてカウントされ腰が痛くなるまで田植えを手伝っていた。秋の休日には稲を天日乾燥するための“はぎかけ”と“稲下ろし”の手伝い、細かい稲藁がチクチク首回りを刺す嫌な作業だったが、はぎ木に渡した横竹のてっぺんに登って日本海を見たり、3m位の高さに

積んだ稲穂の上で周りの景色を見るのは良い気持ちだった。

今では集落に数軒に減ってしまったが、地域のほとんどの農家は乳牛を飼い安定収入を図っていた。我が家も多いときで7、8頭の搾乳牛を飼っていたので、仔牛へのミルクの準備と乳房炎を防ぐためにも大事な敷料の稲藁切り、寝床の掃除などが私の日課であった。その頃は糞尿混じりの敷料を田圃の一角に積んで堆肥を作り毎年施していた。朝早くからの草刈り、年中休み無しの牛飼いは大変な仕事であるが、出産直後の出荷しない乳に酢を垂らし、煮て固めたものを我が家では“乳豆腐”と呼んで食べたり、20L位を風呂に入れた牛乳風呂に浸かっていたのは懐かしい思い出である。

生計向上のための努力は長年に渡って続けられ米作りに加え、祖母の時代は養蚕、缶詰用イチジク、サクランボ栽培、真冬の石臼を使った豆乳作りが難儀だったと語られる豆腐と油揚げ作り、父の時代は酪農が一番長かったが、野菜採種、スイートコーン、蕪、そしてアスパラガス栽培と色々挑戦していた。兄は専ら搾乳など乳牛の世話が日課であったが、スイートコーンや蕪を新潟市中央卸市場に出荷する手伝いが私の役目であった。



晩秋の飯豊連峰二王子山裾野に広がる田圃

生まれ育った環境は作物をどの様に作り、家畜を育てるのかを肌で感じられる自然豊かな所であった。しかし、農業に寄る生活は大変だなどの思いは強く、その後の進路には選ばなかった。